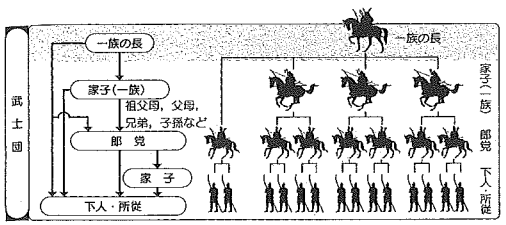
一　平氏と肥前

(一)　武士の発生

中世の歴史を展開させる主なる勢力は農民と武士である。

一〇・一一世紀になると、荘園・公領（国衙領）を問わず成長してきた田堵・名主層の有力農民は、自衛のため武装化してきた。やがて荘園の荘官層、公領の在庁官人、郡司・郷司・保司層の豪族は、血縁で結ばれた家の子や、配下の名主・下人などの郎党によって戦闘団体である武士団を形成していった。



武士団の構成

このような中小武士団は次第に地域的に連合して「党」を形成したり、国司（受領）などとして地方に赴任してきた中央貴族の傘下に加わって、その棟梁を核として大武士団を形成していった。

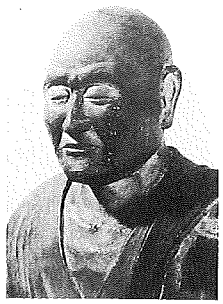
『日本三代実録』の貞観八年（八六六）七月十五日丁巳の条に、肥前国基肆郡擬大領山春水、藤津郡領葛津貞津、高来郡擬大領大刀主、彼杵郡人永岡藤津らは新羅人と共謀し、射手四五人を率いて渡鮮し、その後対馬を討つ陰謀のあったことが発覚した、との記述がある。すなわち、肥前においても九世紀半ばすぎ、既に郡司層の豪族がこのような動きを示していることは注目すべきことで、彼らは射手四五人とあるように、武術に熟達した私兵を蓄えて武装化していた様子を知ることができる。

(二)　平氏と肥前

院政を始めた白河上皇の厚い信任を得ていた平正盛は、北面の武士（院御所の警備のためにおかれた武力組織）に登用され、武士の棟梁として、その勢威を西国に伸ばしていった。

正盛の子忠盛は、大治四年（一一二九）と保延元年（一一三五）には山陽・南海道の海賊を討ち、西国に基盤をつくった。武士として初めて昇殿を許された。また、長承二年（一一三三）には院宣（上皇の命令を奉じる文書）と称して宋の商船を院の御領神崎荘へ迎え、貿易の利益を独占している。

次いで忠盛の子清盛は、保元・平治の乱を経て平氏政権を樹立した。その勢威は『平家物語』によると、平時忠（清盛の妻時子の弟）が「此一門にあらざらむ人は皆人非人なるべし」と豪語するほど強化された。


鑑真像

『源平盛衰記』は、平家の人々の言葉として「西国は手武者」と称させている。確かに鎮西は平氏にとってはゆかりの地であった。清盛・頼盛兄弟は相ついで大宰大弐に任ぜられた。また清盛は肥後の八代郡内および肥前の杵島郡内

に大功田を与えられたが、平氏一門の領有する荘園も鎮西には数多くあった。

平治元年（一一五九）のころ、肥前の「惣追捕使」と称していた日向太郎通良が、「野心をはさみ、謀叛を起こした」ので、朝廷は平清盛に鎮圧を命じた。清盛は家人の筑後守平家貞を派遣して追討させた。家貞は数ヶ月後の永暦元年（一一六〇）四月、日向一党の者三三五人を討ち取り、通良らの首級を持ち京都に帰った。清盛は勲功の賞により二階級特進して正三位に叙せられた。清盛の弟教盛に与えられた嘉瀬荘も、もと日向氏一族の荘園だったと考えられる。清盛は杵島郡の長島荘も授けられている。

平氏の佐賀進出は大宰府を介して行われたが、それは大宰府の兵站地としての要求であろう。その支配は平氏滅亡時まで続いたが、大宰府の後衛・兵站地としての肥前佐賀という位置付けは、中世社会を一貫して変らない。

(三) 平氏と嘉瀬

嘉瀬津は有明海に面した港として古代より賑わいをみせていた。その事例をあげる。

安藤更生氏は『鑑真』（吉川弘文館、人物叢書一四六）で、鑑真和上の上陸地として鹿児島坊津から嘉瀬のコースを示されている。これは唐船ではなく遣唐船であるが、大陸から嘉瀬津に来着する最も古い事例である。

西国を拠点とした平氏も嘉瀬津とは極めて密接な関係がある。『平家物語』巻三には、鹿ヶ谷の陰謀で鬼界が島（現鹿児島県大島郡鬼界町）に配流されていた三人のうち俊寛を除く二人、すなわち平康頼、藤原成経が赦免されて同島を去ることになった。この際二人は藤原成経の舅平教盛の所領である鹿瀬で一旦休息している。その後備

前の児島を経由して帰京している。つまり、鬼界が島―有明海―鹿瀬（嘉瀬）、鹿瀬（嘉瀬）―有明海―瀬戸内海のコースが、この物語作成上の前提となっている。

佐賀の代表的な伝説の一つである「俊寛伝説」は、鬼界が島に一人残された俊寛が人知れず同島を脱出し、佐賀の嘉瀬荘に隠れ住む話で、江戸期の寛文五年（一六六五）の『肥前古跡縁起』にも記載されている。旧嘉瀬津である現嘉瀬町荻野の法勝寺には俊寛の墓も伝承されている。『歴代鎮西要略』には安元二年（一一七六）八月二十三日に平教盛（清盛の弟）が、賀瀬（嘉瀬）津の船長荒木入道乗観を西国三三国の「船問職」に任じたという記載がある。この記述は信用しがたいが、後年これを裏付けるように記された鍋島勝茂判物と鍋島監物判添状が法勝寺に残されているので記しておく。

法勝寺の伝俊寛の墓（嘉瀬町荻野）

一　鍋島勝茂判物

於肥前嘉世津往昔荒木乗観入道へ給平中納言教盛之書出、右乗観末孫雖有之、於渡置者放失之儀も可有之與存、法勝寺へ遣置之嘉世津為規模如斯、然者敷地壹段三畝廿歩、此米貳石壹斗八升余之事彌令裁許畢

慶安三年五月廿三日　　肥前侍従勝茂花押

一　鍋島監物添状

丹波少将成経平判官康頼俊寛僧都硫黄島へ流罪之刻、嘉世津の荒木乗観上下就致辛労候為褒美、平中納言教盛之御教書右乗観へ給也、此中表具被成被召

置候得共、猶以来も嘉世津為規模與被思召、御書出被差副於遣置候、可被入御念事尤候、為後日如斯候、已上

慶安三年五月廿三日

鍋島監物　花押

この文書は俊覚伝説を裏付けることになっているが、その是非は別として、この地に古くから所伝があったことは確かである。

有明海における嘉瀬津の水運は古代より重視され、一二世紀後半には平氏との結びつきを強くしていたことが理解される。

嘉瀬川の東、現佐賀市鍋島町八戸の五龍神社は「田中の長者」の伝説を伝えている。五龍神社は航海の神を祀っている。かつては嘉瀬川の支流である本庄江の河口は現在よりさらに平野部に溯り、その流路から分枝した江湖や堀（クリーク）に囲まれていたと想像される。「田中の長者」伝説というのは、田中某と称された巨万の財宝を蓄えた人物が大船を浮かべ、大陸と交易し、その過程で海上の平安のために龍神を深く信仰する話しである。「田中の長者」は与賀荘、もしくは嘉瀬荘の名主あるいは開発領主的人物の投影で、彼は嘉瀬川を利用した海上輸送にも携わり、これにより当時周囲の羨望する巨富を蓄えたため後世に伝承化された人物と考えることもできよう。

以上からして、平氏は名主や開発領主的な人物で、嘉瀬川水系での船主クラスの有力者との結びつきをもっていたことがわかる。

二　鎌倉幕府の成立と肥前

(一)　治承・寿永の乱と肥前

治承四年（一一八〇）に後白河法皇の皇子以仁王と源頼政が、平氏打倒の兵をあげた。決起を呼びかける以仁王の令旨は諸国の武士に伝えられた。この呼びかけに応じて、伊豆に配流されていた源頼朝や木曽にいた源義仲をはじめ、各地の武士団が次々と立ち上がり、南都北嶺の大寺院の僧兵もこれに応じて、ついに全国的な内乱が五年にわたり続いた（治承・寿永の乱）。

平氏は大宰府や筑後の原田種直を通じて、平氏への協力を要請している。一方、源氏は平氏への協力体制にあった鎮西武士の切り崩しを展開した。

平安後期以来、地方では国衙（国司の執務施設）の在庁官人（国衙で行政実務を担当した役人）や、郡司・荘官・土豪等の中から次第に武士化の傾向をたどるものが出てきているが、佐賀地方も例外ではなかった。一二世紀後半の頃現在の佐賀市域内には、佐嘉荘をはじめ牛島・巨勢・蛎久・鹿瀬（嘉瀬）荘等の荘園があり、小津東郷・深溝北郷など若干の公領もあったが、これらの荘園・公領には多数の土豪が武士化しつつ成長していた。

やや後世のものであるが、嘉禄二年（一二二六）二月日付の「佐嘉御領内小地頭等申状案」（『龍造寺家文書』）